

Title	動物の時間弁別行動に関する基礎的研究
Sub Title	
Author	伊藤, 正人(Ito, Masato)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1982
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.22 (1982.)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	学事報告：学位授与者氏名及び論文題目：博士
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000022-0098

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

学事報告

学位授与者氏名および論文題目

修士 (昭和 56 年 3 月)

社会学修士

- 第 408 号 石田 米一 沖繩農村の変容過程とイノベーション受容構造
- 第 409 号 鹿又 伸夫 移動過程としての職業選択—行為論的接近と職業的社会化理論—
- 第 410 号 坂本 邦彦 東アフリカに於ける伝統的法体系の動態—バンツール・ナイロート系を中心に—
- 第 411 号 竹林 史郎 超越論的問題の露呈 (新しい社会学への序論)
- 第 412 号 トドロビッチ・トミスラヴ 「日本人の日常生活におけるテレビの機能」
- 第 413 号 中島 洋子 幼児におけるコミュニケーションの発達
- 第 414 号 今中真理子 カール・マンハイムにおける「全体」概念と真理問題
- 第 415 号 植野 陽一 産業労働の心理学的研究に関する考察—労務管理技法の検討をとおして—
- 第 416 号 阿久津昌三 西アフリカにおける首長制社会の構造変動と政治行為の動態
- 第 417 号 熊田 俊郎 構造及び機能概念再考
- 第 418 号 奥出 直人 New Orleans, 1850-1880 — The world the White and the Black made (in English)

第 419 号 平野 学 筆跡とパーソナリティの関係についての実証的研究

第 420 号 加藤 千恵 『公平理論』研究

第 421 号 坂入 久也 マックス・ウェーバーにおける国民理念—政治社会学的研究—

文学修士

第 422 号 田中 毅 ハトの条件性弁別による線型序列学習

第 423 号 徳永 伸子 幼児における形の“半分”の理解とそれに及ぼす訓練効果

教育学修士

第 424 号 小倉 康仁 テキストの理解と記憶—スクリプト理論の観点から—

第 425 号 渡辺 弘 小林一茶の子供観

第 426 号 五十嵐敦子 モンテッソーリ・メソッドにおける「自由」の理論

第 427 号 糸日谷秀幸 「創造心理学序説」

第 428 号 小川 哲也 SCRIPT 理論による幼児の発達の研究

第 429 号 田島由美子 大学生の職業的同一性形成過程

第 430 号 赤尾 勝己 生涯教育の context における教育形態の吟味—学校教育との関わりを中心として—

第 431 号 安友 進 教育変革と社会変革

第 432 号 小川 春喜 日本近代教育における「幼学綱要」の役割—元田永孚の国教思想とその普及の実態—

博士 (甲)

文学博士

第 618 号 伊藤 正人 昭和56年3月30日

動物の時間弁別行動に関する基礎的研究

[論文審査担当者]

主査 文学部教授・社会学研究科委員

文学博士 小川 隆

副査 文学部教授・社会学研究科委員

文学博士 佐藤 方哉

同 文学部教授・文学博士 古崎 敬

[論文審査の要旨]

時間弁別に関する研究は実験的行動分析の手法によって近年、盛んに行われるようになったが、この手法については多くの問題を残している。本論文は実験的行動分析が開発した手法と成果を考察し、特にその手法についての問題点を比較研究したものである。

論文は六章に分れているが、序論ともいべき第一章では時間弁別における強化スケジュールの特質、時間の序列 (time allocation) と時間の対応 (time matching) の事実、Premack の理論にみられる反応強化力の反応従事時間による測定、行動決定の側面としての時間的接近原理などの行動的アプローチを概観し、時間的過程を明にする方法の確立のため、動物心理物理学的方法の検討が重要であることを主張している。

第二章では上記の視点から従来の動物心理物理学的方法による時間弁別の研究が展望されるが、時間の行動を指標とした尺度構成が一種の転移実験として考えられること、しかし、転移実験としての般化法の適用が困難なことを指摘し、新に見本時間反応潜時分化強化スケジュールとよばれる方法を開発し、尺度構成の可能性を探ろうとする意図が述べられる。

第三章にはこの方法を検討するため、日本ザルとカラスとを被験体とした実験 I, II, III, IV が報告される。この方法の特徴は、弁別すべき時間が見本時間として外的に与えられていること、反応潜時の分化強化スケジュールを用いていることから見本時間との一種のマッチングが可能なこと、ヒトの心理物理学的方法の一種である再生法に類似していることである。1セッション、1種類の見本時間では直接手掛りとはならなかったが、反応潜時の分化強化により、反応潜時の分化が形成され、設定時間と平均反応潜時との間にベキ関数が成立することが示された。また、この条件では強化率の変化に規則性がみられ、これが行動を制御する要因であることが予想されている。

第四章では引き続き、見本時間による反応潜時の制御が問題とされ、見本時間の手掛り機能を形成するため、2種類の見本時間を用いる条件で強化可能の制限時間を設定、これに従って制限時間を越えたか否かを知らせる信号を導入し、さらに各見本時間をブロック毎に交替呈示することの効果が検討されたが、実験 V, VI, VII では、これらの手続を用いることによって見本時間の手掛り機能形成が可能ことが示され、実験 VIII では、見本時間をランダムに呈示しても、部分強化しても反応潜時の分化が維持されることがみられ、この手掛り機能が十分に働いていることが示されている。

このような実験方法の検討を重ねた結果、第五章では、これを踏まえた尺度構成の試みがなされている。訓練期の2種類の見本時間にさらに4種類の見本時間を加え、実験 IX では弁別後般化法、実験 X では維持性般化法への適用が吟味された。弁別後般化法では総ての見本時

間に対して消去の操作がとられたが、維持性般化法では訓練期の2種類に強化がなされた。弁別後般化法では、反応潜時の変動が著しく、反応自体の突発的休止などがみられたが、維持性般化法では、両端の見本時間を除くと平均反応潜時と見本時間との間には単調増加関係がみ出され、この方法が尺度構成に有効なことが示された。

第六章では上記の諸実験の成果が要約され、結語として見本時間は反応潜時分化強化スケジュールによる方法の、時間弁別についての尺度構成に対する可能性が改めて主張されている。

本論文は、時間弁別に関する従来の動物心理物理学的手法による諸研究の問題点を明確にし、新に見本時間付反応潜時分化強化スケジュールによる尺度構成の有効性を示している。この方法について著者が用いた分化強化スケジュールはまだ限定された範囲についてであり、広く他の分化強化スケジュールについても照会さるべきものであろうし、この方法によってどのような時間弁別過程が明にされるかは今後に待つものであるとはいえ、著者が一連の実験的研究によって時間弁別過程を明にする上に重要な方法論的寄与をなしたことが認められ、高く評価さるべきものである。

著者は本論文によって文学博士の学位を受けるに値するものと認める。

文学博士

第 619 号 実森 正子 昭和56年 3 月30日

デンショバトにおける色相弁別行動

〔論文審査担当者〕

主 査 小 川 隆

(文学部教授・社会学研究科委員・文学博士)

副 査 佐 藤 方 哉

(文学部教授・社会学研究科委員・文学博士)

同 小 谷 津 孝 明

(文学部助教授・文学博士)

〔論文審査の要旨〕

実験的行動分析の導入によって近來の動物心理物理学は新たな転回期を迎えているといえるが、この動向は、デンショバトの色覚に関する研究において特に著しいものがある。

本論文はデンショバトの色覚、殊に色相弁別行動の解明に寄与したものである。論文の構成は I 序文、II 問題提起、III 実験、IV 総合論議の4部からなる。